

魚類養殖指導 スギ (クロカンパチ)

多和田 真 周

1. 目的

小割生け簀放養後の管理指導と養殖技術の安定化

2. 対象

養殖グループ

3. 協力機関

水産試験場・漁業協同組合連合会・漁業振興基金

4. 経過

スギの養殖は平成8年度から開始されて3年目であるが県内での親魚養成は水産試験場で平成9年から着手され、今年度自然産卵により受精卵が得られたことから種苗生産した結果、数千尾の稚魚が生産できたが養殖業者に配布するには至っていない。今年度も県漁連購買課が窓口となって台湾から稚魚を輸入して業者に配布することとなった。

平成10年度初めての稚魚の導入は4月22日に空輸、110尾×100箱=11,000尾(内110尾は水試へ)平均全長は88mm、全体的に活力は良好で羽地漁協運天原仲宗根氏の生け簀へ収容された。

翌日の飼育状況は輸送によるストレスで摂餌不良状態であったがサンマをジュウサーにかけ、それにマダイ初期用配合飼料を加え給餌したところ活発に摂餌するようになり斃死魚はなかった。

塩屋グループ7名の要望数は13,800尾で納品数は約14,600尾そのうち斃死数は355尾、輸送歩留まりは95%以上であった。高率歩留ま

りの要因としては種苗が大きいこと、袋あたり55尾と低密度、天候条件が良好であったことによるもの。斃死原因はビニール袋の酸素漏れによるものであった。

1日経過後のスギ(クロカンパチ)の稚魚の状況を観察したところ、斃死魚ほとんどみられてない。水泥状にしたオキアミ等の餌を給餌、活力、摂餌共に良好であった。

5月8日分については羽地運天原グループに約15,000尾を配布、箱の破損が2ケースあり、防疫検査のため、1ケースは水試へ搬送した。

3尾の斃死と20尾程ふらつき固体が確認された。大型サイズ(10cm・1,540尾)は餌止めされておらず、ビニール内海水は茶褐色に汚れており、その影響で8割は斃死、2割の生残率であった。

5月18日分は糸満漁協に約5,000尾配布、斃死数は427尾、歩留まりは92%、2袋に酸素漏れが確認された。羽地漁協運天原グループ4名に約12,400尾を配布そのうち910尾の斃死を確認、歩留まりは90%以上1袋あたり平均4尾のふらつき魚と斃死魚がみられた。

6月5日には本部漁協に3,000尾、読谷漁協に3,000尾が配布されている。7月17日には伊江漁協には5名分約7,300尾、今帰仁漁協には約2,300尾を配布、梱包箱の破損は4箱有り、ビニール袋のエア漏れは2袋あった。稚魚の大きさは8~10cmで活力も良好であった。110尾は防疫検査のため水試へ搬入されている。その後7月の下旬にも浦添・宜野湾、知念、羽地漁協運天原グループが稚魚を導入をしている。

以上4月下旬から7月下旬まで合計9回の輸送により約9万尾の稚魚が導入された。輸送歩

留まりは95%以上と向上、梱包箱の強度の改善、稚魚の大型化、活力魚の育成が要因だと思われる。

輸送当日天候に恵まれたことにより生け簀放養時の適正な環境と餌付け技術の向上により減耗がほとんどなく幸先のスタートとなった。

魚病関連では水産試験場に搬入したクロカンパチ稚魚からイリドウイルスが確認されたことで6月10日に魚病関連対策会議を水産試験場で開催、水産振興課3名・水産試験場3名・普及所1名が参加して対応を協議、未感染地域（宮古・八重山）については当面導入を禁止することとし感染地域については文書で啓蒙、自粛を促すこととした。

水産試験場で若干の種苗が生産されたのでその取り扱いについて、7月21日に種苗作業部会が開催された。県産クロカンパチ種苗配布計画について、水産試験場での生産原価は160円であるが県漁連が台湾から輸入している稚魚は168円で販売されている。しかし、その半分は輸送費であり、従って80mmサイズ種苗であれば稚魚の大きさ1mmあたり1円で販売したいとのことで了承され今後県産クロカンパチの販売窓口は県漁連購買課に担当してもらうことに決定した。

現在若干の種苗を育成中であるが親魚養成用として提供していただいた糸満漁協養殖グループに配布された。

流通関連については県漁連加工場が各養殖場からクロカンパチを買い上げフィレ加工して出荷している。しかし、養殖場によって製品に大きな差があり同一価格での買い上げに問題があると指摘があった。この要因はイリドウイルスの発生によりマダイ同様夏期高水温の期間がかなり長いことから餌止めあるいは規定量以下の給餌によりヤセ状態のクロカンパチが数多く占めることによる。また、一部業者はハダムシ寄生による影響で摂餌量の減少も要因の一つと考えられる。いつでも出荷できる状態にしておくのが最上であるが高水温時は餌をいくらでも摂

餌すること、价格的に安定しないため、適正給餌量を低く押さえる傾向がみられる。

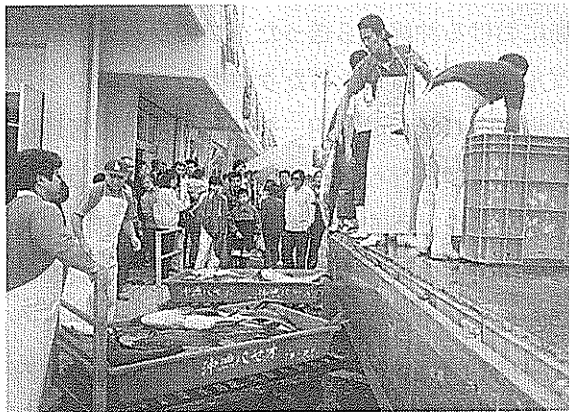
10月26日にはクロカンパチ流通のことについて羽地漁協会議室において県漁連・振興基金・水産振興課・市役所・羽地漁協運天原塩屋養殖グループ員が参加して検討会を開催した。振興基金から台湾・鹿児島におけるクロカンパチの生産流通状況の説明、県漁連加工場から東京市場における沖縄から送ったクロカンパチの価格、グループから買い上げたクロカンパチのフィレの歩留まり状況の説明、普及所から飼育管理について説明が行われた後、その後今後の出荷体制順番等をどうするか協議、あわせて鮮度保持対策（特に血抜き方法）について後日全員参加により講習することにした。

平成11年2月15日にはクロカンパチの県内流通の促進をはかるため、沖縄市産業交流センターにおいて沖縄市役所、沖縄市漁協、浮魚礁研究会側にクロカンパチの養殖状況の現状説明し、パヤオ直売店で土、日曜日祝祭日（3月下旬）にクロカンパチの試食、販売に協力することを約束した。

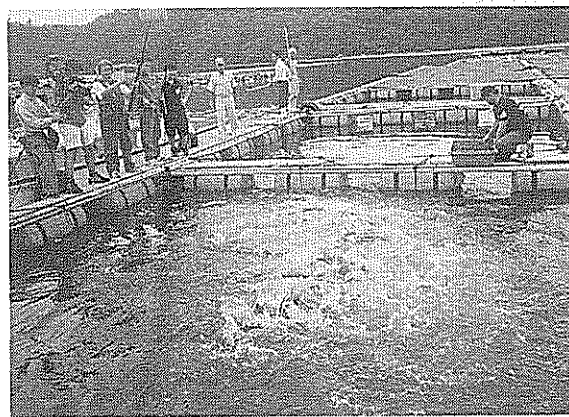
平成11年3月19～21日にはクロカンパチフェア展示即売会が沖縄市パヤオ直売店で開催された。20～21日は雨模様の天気であったが大勢の消費者が訪れ、2日間で450尾（5.5kgサイズ：約2,475kg）をkgあたり1,100円で販売した。計画では300尾程の予定であったが2日目の午前中で完売、急遽羽地漁協に連絡追加させて対応した。店内レストランではクロカンパチ料理4種（バター焼き・煮付け・ウニ焼き定食・汁）が2割引きで提供され品切れになるほど好評であった。パヤオ直売店としてはこれで終わらすことなく、継続して取り扱いするようである。

県産種苗の供給も数年中には可能になると思われ、飼育技術もほぼ安定傾向にある。今後の問題点としては採算割れが生じない様にするためにはどうするか、飼育コストの低減にも限界

があることから流通に関することは今後の課題といえる。



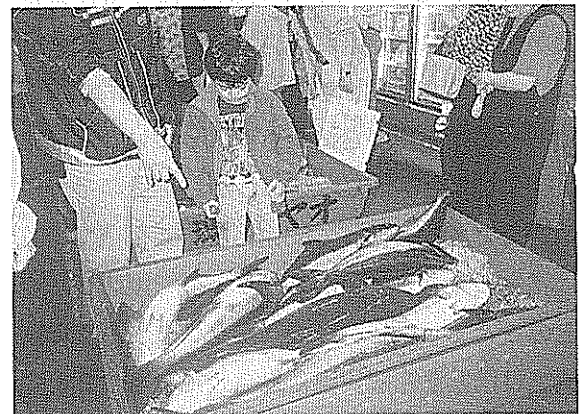
パヤオ直売店へクロカンパチの搬入



漁船のクロカンパチの給餌（名護運天原）



パヤオ直売店でのクロカンパチフェア。
魚を購入するため訪れた人々。



店頭に並べられた5kgサイズのクロカンパチ



大漁旗に飾られたクロカンパチフェアの会場
(沖縄市パヤオ直売店)